
Piece to Peace

パウリの甥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P i e c e t o P e a c e

【Nコード】

N 9 1 8 8 Z

【作者名】

パウリの甥

【あらすじ】

一人の麗しき女性を巡って四人の男たちが踊る悲喜劇・・・

感情では足りなくて、理性では語れなくて、本能では知ることのできない・・・何が正しく、どうしたら赦されるのだろうか？

本作品は志保さんを中心にした逆ハーレム(?)なお話です・・・このような設定、もしくはキャラクターの描き方が受け入れられな

いかたはまわれ右を推奨します・・・

Scene 1・0：現と夢（前書き）

勢いで書いてしまった連載ものです・・・こんな作品を読んで頂き有難うございます・・・ただし、作者が筋を確定していないのでどんな物語になるかは皆さんのご意見や感想等で大きく変わるかもしれません・・・

では、ごっごー！

Scene 1・0：現と夢

”桜の花びらが吹雪のように舞う中で、僕は彼女に恋をした・・・”

”それは、世界の理をいやそんなものではない自分の価値観そのものが揺らいでしまつぐらいのものだった・・・”

”月並みの言葉しか思い浮かばない・・・けど、彼女の為になら何もかも捨ててしまつてもかまわないとそう思ったんだ・・・”

”世の無情さを知り、日々のモノな生活に浸るとそんな理想などケーキの上まぶしたパウダーシュガーのように儂く、またほんの少しの因子で崩れ消え去るものだ・・・ならば、己を大事にし己の為に生きるのが賢く、また利になつてゐる。”

なら、声を大にして叫ぼう・・・彼女が僕にとっての”世界”であり、全t・・・

「あら、新しい作品の下書きかしら？あなたにしてみたら、随分

と可愛らしくて素直な文章ね・・・」

女はいつの間にか、俺の後ろに来ていたようだ・・・こういう気配を消すところや皮肉をいうところは最初はあまり好きではなかった・・・ただ、時を重ねるうちにそこすらも愛おしいと思ってくるのは何の幻覚作用なのだろうか？そうして思わせぶりの態度を口調の端々に込めて、柔らかく甘美なそれでも行く先は生き地獄・・・ともいうべき白き肢体を俺に擦り付ける・・・媚びるように、または俺を憐れむように・・・

とある大都市の繁華街に君臨する、翡翠の女王・・・人は彼女のことをこう云う。まるで、この世の男は自分の為でありそれは一重に奉仕するだけの存在・・・と言わんばかりの不遜で、高飛車で・・・けどそこには高貴と、怜悧が相まって・・・単なる女の粹を超えている、ある意味規格外な人間だ・・・

その容姿に惹きつけられる奴が大半だが、中にはこのどうしようにもならない性格が好きな輩もいるようだ・・・

そういえば、同じ作家仲間の服部は

「あの、どうしようもないぐらいのツンデレぶりがええねん？わかるかあ〜平成のコナン・ドイルさん？」

そもそも、同じ推理小説家のクセして「最近、売れ筋がエエから

のう」の一言でラノベ作家に転向しやがったアイツは殊、ツンデレやらヤンデレやらと女性を何かの型にはめようとしている・・・これも、奥さんに先立たれてしまい男手一つで息子を養わないといけないからなのだろうか・・・

昔は、小説家の大家でもある父親を超えてやると息巻いており一心不乱に作品を書いているうちはよかった・・・ただ、父親を病で亡くしてからは目標と目的を失い酒量も増え自棄になる一方・・・それでも、奥さんの和葉さんとは上手くいつていたようだが生来、身体が弱かった彼女は一人息子を産み落とすと残されていったこの色黒男を心配するように世を去って行った・・・

それから、件の歓楽街に繰り出し色々悪い噂が絶えない中その「彼女」に出逢ったそうだ・・・

それから、崩れるのはいとも簡単だったそうで・・・と”彼女”は事も無げに語った・・・

俺は、最初は服部をそそのかしたのはこのオナナのせいだと決めていた・・・確かに、酒におぼれ誇りも夢も失いはしたがけど自分の信念^{かすはこん}を捨てるはずがないとそう思っていた・・・

なので、俺は单身あのオナナの”拠点”に向かっていったのだ・・・

・
・
・

．．．．．きて、．．．．．どじくを．．．．．起きて、．．．．．

霧がかかっているみたいだ．．．意識が浮上することを本能で拒む．．．．．

「起きなさい、工藤君!」

はっとなり目を覚ます．．．．．白い空間にポツンと置かれたダブルベッドとサイドテーブル．．．光が遮光ガラスすらも透過してい

るのではといつぐらい光がこぼれている……

……夢？……

「起きなさい、工藤君？今日は初日でしょ、脚本家がいなければ舞台はご破算になるわよ……」

「翡翠の……女王……？」

「は？何寝ぼけているの工藤君？それとも、頭の中はもう仕事モードな訳？江戸川センセイ？」

「あついや……済まない少し寝ぼけていたんだ……志保……」

「ちよつと、昔馴染だからっていつてファーストネームやめてくれるかしら？それに今は何も無いでしょう？工藤君……」

「つあああ……昨日は夜遅くまで有難うな……若手実力派女優さんの意見も聴けてよかったよ」

そう、彼女……宮野志保。芸名、灰原哀。モデルから始まって、その容姿と見る者を惹きつける雰囲気と卓越した演技力で既に二十代初めで実力派女優の仲間入りをしている……その他を圧倒するオーラと理的でかつ聡明な眼差しから彼女のことを「翡翠の女

帝」や「極東の至宝」と……まあ、有りがちな表現では足りないぐらいの通り名や惜しみない贅辞が与えられている……

そして、オレにとっての初めての女性たいせつなひとだったし初めての相手でもあり……これからも変わることはないだろう……

オレ、工藤新一と宮野志保、そして高校の同級生だった黒羽快斗、大学の演研で知り合った服部平次は昔からの俳優仲間だった。ただ、オレ一人演劇の才に恵まれなかったこともあり今は脚本家でなんとかこの世界に残っている……

ただ、オレが俳優をあきらめ脚本家になって暫くして志保との距離は遠のいていった……今では脚本家と女優という細い繋がりだけ……

P i e c e t o P e a c e - S c e n e 1 . 0 : 現と夢

I m i t a t i o n t o T r u t h

この前の打ち上げもそうだったが先の二人に加え、二世俳優の白馬
なんとかというやつも彼女のことを虎視眈々に狙っていた・・・
共演者しかもヒロインとその相手役ということもあり確かに、二人
が会話をし微笑み合っている姿は「様になっている」し、誰からみ
てもお似合いな二人でもあった・・・

「ほんと、白馬のヤロー！あんなに志保ちゃんべったりで・・・」
「なら、お前がアタックすればええのに？のう、工藤？お前からも
なんか言うつたれや・・・」

「しらねえし、興味もねえ・・・そもそも、オレはアイツのモノで
も無ければ、アイツはオレのモノでもねえーし・・・そもそも、
雛森代議士の娘に手だしたお前が言えてギリかよ？デキちまったん
だろ？」

「そうそう、聞いてよねえ新ちゃん……それがさ、見てよこれかわいいd」

「先も言ったが、こんなモノクロ写真でわかるか？そもそも、まだ生まれてもないのに言えるか！」

「新ちゃんのいじわる！？……けどさ、新一……お前はそれでいいの？」

「そうやで……このままだとオレがアタックしてまうで？それでええのん？」

似たような顔立ちの男が、オレを諭すように言う……分かってるさ、そんなこと……けどオレの一方通行^{おもい}だけではだめだろう……
……彼女^{しほ}も呼んでくれないと……

.....けど、オレはあの時.....

.....志保の一方通行おもいをはねつけてしまった.....

「.....いいんだよ、別に.....」

新一はグラスに残っていたカクテルを空虚な胃に無理やり流し込んだ。アルコールと酸味の利いた風味が胃を刺激する。この嘔吐感

や胸やけは果たして、生理的なものだけなのか？それとも、・・・

胸に去来する何とも言えない想いを酒精と快楽で塗りつぶせたら
どれだけ楽になれるか・・・

答の見つからない、不毛で虚しい自問自答に蓋をしてラウンジのガ
ラスに映る人工のランタンの灯りをただ見つめるだけであつた・・・

「志保さん、今晚はどうです？この後、いい感じのバーがあるの
ですが、一緒に来られますか？」

「白馬君にしては、安易でストレートな誘いね？いいのかしら？
結構、イケる口よ、私？」

軽くウェーブのかかった赤茶けた髪をさつと指に絡ませて後ろへ流

す……さりげない所作にも優雅で気品が溢れていて……昔の
あの人を彷彿とさせてくれる……やはり、彼女は僕にとっての
・

白馬探が彼女と出会ったのは映画作品での共演だった……自分は、
志保の恋人の恋敵役を演じたのだ……その演技が認められその年
の映画賞の賞という賞を独占し、二世俳優という偏見じみたレッテ
ルをも覆したのだ。ただ、白馬自身はよく自覚していた……それ
は、あの時の素の自分をありのままに見せただけで演技などという
ものとは遠いものだったということ……

過去に縛られるのも悪くはない……いや、今も僕は引き摺っ
ている……けど、今はこの状況に身を委ねたい……

それが、たった一時の安らぎであっても、彼女に向けているもの
が愛情ではなく哀情であるということ……

秀麗な目をつぶり、今浮かんだ考えを瞬時に消し去ると笑みを向け
る……聡明な彼女にはすでに気付かれているかもしれない。偽り
の思慕、偽りの眼差し、偽りの微笑……それでも、いい。

僕は、道化師・・・操り手は自らの感情・・・その
役は深い哀情・・・

それから、志保と白馬が交際していることが大衆紙に載ったのはそ
れから三日後のことだった・・・

人間、習慣づいてしまったことは判を押したが如くそこには感情の余地も一切いれずただ黙々とこなすことができる。例え、寂寥感に満たされても焦燥感にかられようととも社会という大帝に奉仕する従者となり今日も与えられた仕事を消化する……

そこに生きる価値を見いだせる人もいる……ただ、それはほんの選ばれた人間にしか過ぎない……やはり、大半はモノな世界に飽き、悩み、絶望し最後は思考を失う……

果たしてこの男は何を思って今洗顔をし、思い人でもそうでもない人間の作る朝食にありつこうとしているのだろうか……それは、過去の陰惨な経験なのかそれとも取るに足らない砂上の虚栄心なのか……

穏やかな朝日の中、ダイニングには煎ったコーヒー豆の芳醇な香り、トーストの香ばしい匂い、フライパンの上をはぜる水分の音で充満

している……男は、テーブルの上を一瞥する。昨夜あつたはずの大量の資料と校正したての脚本の山、仕事道具でもあり彼女から贈ってもらった唯一の品であるヤード・オ・レッドの万年筆がこへいったかと一瞬驚いたようだっただが、

「仕事道具なら、あなたの仕事机に置いといたわ。それと、昨夜の議論はちゃんとまとめといたから。ちゃんと目を通しておいてよね。それより、早く朝食を食べて頂戴。本当に遅刻するわよ。」

こつも、自分の足りないところをさりげなくフォローもしてくれるそれにそつ無く何事でもこなせる……まるで、自分の欠けた半身であるかのように必要な彼女……でも、

「そろそろ、あなたもアシスタントを雇ったら？そこそこ有名にもなったんだし……」

彼女は呼ばない……その声も霧散して意味をなさない……どうして、アイツなんだよ……

「もし、必要なら私から紹介するけど」「オイ、どういつつもりだよ？」「工藤君？」

「どうしてなんだよ？なんで、オレの名前を呼ばないんだよ！！オレはここにいるのに」「違っわ！！」「志保……？」

気が付いていたらオレは志保の手を思いつきり掴んでいた……
白くて陶磁器の様な肌……そして小枝細工のように精緻ではかな
く壊れそうなほどの腕を……そこは見る見るうちに紅くうっ血
する……まるで、己の存在を自己主張せんがために……それで
も、分かっただけでオレはやめなかった
……

「……あなたは、変わった……それがまだ分からないの
？」

けど、オレが大事にしたいアイツは……泣きもせず唯じっとオ
レを見つめていた……

その瞳には、怒りの感情とも悲しみの感情とでもなく……ただ、
独り考え苦しみ抱え込もうとしている眼だった……

「……朝食、冷めないうちに食べて……アシスタントの件は
私が妃先生を介して紹介しておくから……」

気が付いていたら、コーヒーの湯気も消え去り温かみがある白い印象派絵画もどす黒い陰惨とする前衛芸術へと変貌していた・・・
それに一瞥をしたため息をするとデスクに整頓された資料を無造作につかみ黒革のくたびれ鞆に詰め込んだ・・・

そして、オレの気持ちをこ丁寧に代弁した冬の寒空のもと飛び出したいった・・・

Scene 1.0: 現と夢(後書き)

前作に引き続き、またもや見切り発進で……自分の馬鹿さ加減にほとほと呆れるばかりです……

ほのぼのからいきなりのダークシリアス、そこに鬱をトッピングした感じに……

したい、と思っています……

さてどうなることやら？作者である自分が一番緊張感なく、責任感が無いかもしれない……

ご意見・ご感想等たくさん待ってまーす!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9188z/>

Piece to Peace

2011年12月28日20時57分発行